9枚目のコンドームを
3本目の缶ビールに

老川　柔

New oikawa

三階のミックスルームのいちばん奥ーー。淫靡さを演出する為に灯されたはずの小さな赤い電球が、壁のシミやら端っこの捲れ上がった安っぽいカーペットを、その小さな明かりで浮かび上がらせてしまい、図らずも侘しいもの悲しさを演出してしまっている。
二組並べて敷かれた湿っぽいマット。乱れたシーツの真ん中に横たわるタクミの両肢は、二人の老いた男に抱えられ開かされている。その股の間に膝をつき、上半身を覆い被さるようにタクミの脇に手をついた五十過ぎぐらいのデップリとした腹の男が、体型に似合わないリズミカルなピストンでタクミを掘り上げている。タクミの左腿を抱えた初老の男は、片手で自身の勃起しきれないペニスを擦っている。右腿を抱えた老人は、抱えた腿の裏側を愛しそうに撫上げ唇を這わせている。
他にも幾人かの老いた男たちが仰向けのタクミを囲むように座っている。片手でやはり勃ちきれない自身のペニスを握り締め、片手でタクミの乳首を横腹を尻を撫でている。タクミは全身が性感帯かと思えるほどに、どこを触れられても甘く濡れた声をたて、肌を粟立たせ、体中を波打たせ、くぐもった濡れた息を吐き続けている。
「い……、いくぞ」徐々に早まっていたピストンにブレーキをかけるように、ゆっくりと、抜ける直前まで引いたペニスを、男が一息に挿し込む。
「あぁ……、ん～」然程大きくはない男のものだが、全てを押し込まれたタクミからは、その直前までとは明らかにトーンの違った喘ぎが漏れる。
執拗にタクミの尻を撫上げていた老人も、僅かに体積を増したペニスから申し訳程度の精をシーツに漏らす。
男は射精の痙攣と余韻が収まるとコンドームを外し、その口を縛ると無造作にタクミの顔の横に放り投げて立ち去った。取り巻いている男たちの半分ほども立ち上がる。残った男たちは、神輿の次の担い手が来るのを待つ祭りの見物のように、所在無くタクミの傍に座り込んでいる。
タクミの腹の上は臍を中心に、タクミ自身が漏らした精が乳白色の水溜りをつくっている。脇腹には零れて垂れた、乾いた精がいく筋かの白く薄い瘡蓋のようなものをつくっている。
タクミは近眼の目を細め周りを見渡す。
「俺もいいかな……」
タクミの枕元に立ち、三～四人の神輿の担ぎっぷりを眺めていた裕二が、声をかけながら腰に巻いているバスタオルを落とす。
裕二はタクミと同年ぐらいの三十前後。清潔感の漂う真面目そうな会社員風で、老若や男女を問わずに誰からも好かれそうな雰囲気をしている。百七十五センチ前後の上背も、中肉ながら程よく締まって薄く筋肉が浮かぶ体型も、タクミによく似ている。それでも静

と動、鈍と鋭、軟と硬…、醸し出す雰囲気は正対なものを人に感じさせる。その上、短く刈り込んだ髪で近眼の目を細めるタクミと並べば、優しげな眼差しの裕二の方がタクミにケツを犯られそうにも見える。
「ごめん、少し休みたいな」
　仰向けに横になっていたタクミからは死角だが、声で裕二と判断したのかそちらを見ることもなく答える。ボックスからティッシュを数組引っ張り出し、腹の上と肛門をいい加減に拭う。マットの横に置かれたケースから眼鏡を出して掛けると立ち上がった。
「そか……」
　裕二も強いてとも言わずに未練気もなく簡単に答えると、バスタオルを拾って腰に巻く。ついでに何かを探すように辺りを伺うタクミに、何枚か落ちているバスタオルの中から酷くは汚れていなそうな一枚を拾って投げてやる。
「ども」
　タクミは受け取ったバスタオルを腰に巻き、眼鏡のケースの周りに散らばったローションやら使ってないコンドームをポーチにつめる。
「ーー何人？」
　タクミがいつも決めた数のコンドームを持ってくることを知っている裕二が訊いてみる。
「ん？　あぁ、えーと十二枚残ってるから八人かな？」
「そりゃ休みたくもなるな」
　裕二は少し淋しそうに笑う。
　タクミはそんな裕二の言葉には答えずに、一人残っている老人に声をかける。
「やっぱり爺さんかぁ」
　それは右の腿を抱えて愛しげに撫でていた老人だ。
「いつも触ってるだけで悪いのぉー。ワシは挿れてやることができんから……」
　老人は本当に申し訳なさそうに俯きながら言葉を継ぐ。
「ワシはお前さんに惚れちまっててのぉ、娶りたいぐらいなんじゃ。そんな、お前さんの気持ち良さそうな顔を間近で拝みたくて、つい悪戯しちまうんだよ」
「爺さんの震える手で触られるのも、乾いた舌でザラッと嘗められるのも凄く感じるよ」
「そうかぁ？」
　タクミの言葉に老人の俯いていた顔が少し上がる。
「うんうん、いつか爺さんの愛撫だけを一日中受けて狂ってみたいな」
「本当かぁ？　ワシでお前さんが狂ってくれるのか？」
「うん、本当だよ。いっぱいしてくれたら、たぶん狂っちゃうよ」

「そうかそうか。いつでもしてあげるからワシん所に来なさいよ」
「うん、そうだねぇー。ここじゃ二人だけじゃできないもんね」
「そうじゃろ、だから来なさいよ」
「でも爺さんの所に押しかけちゃ悪いから、ホテルででもやろうよ」
「悪くもないんじゃがの、来づらいんじゃそうだの……。まぁそんなときには、造りやら大きさやらの違う張り型をたくさん用意していってやるからの」
「え？」
「お前さんは尻に何か入れといた方が良かろうが？」
「ま、そりゃそうだけど……」
　タクミの頬が赤らむ。
「八人に輪姦されたタクミでも、照れることがあるのか」
　そんなタクミの変化に、脇に立つ裕二が小声で呟く。その呟きが耳に届いたタクミの頬の色は更に濃くなる。
「まぁ、ホントとは思えんが、ワシはそれを夢に死なないように待っとるからのぉ」
　裕二の呟きが聞こえなかった老人はいつしか、立っているタクミを見上げる程に上げた顔で楽しそうに言う。
「本当だよ」
　タクミは慌てて老人との会話に戻る。
「そうかそうか、それじゃぁ冥土の土産になるのぉ」
　老人は心底楽しそうに笑う。
「駄目だよ、そんな事を言っちゃ。一度してもらって狂っちゃったら、またしてもらいたくなるから……。そんな簡単に死ぬこと考えちゃ駄目だよ」
「そうか……、そうだなぁ。それじゃワシも長生きせんといかんなぁ。」
「うん、そうだよ。長生きしてよ」
「生きる張り合いが出てきたよ」
　老人はそう言うと、水戸のご老公のようにカッカッカと高く笑った。
　優しい気持ちでタクミと老人とのそんなやりとりを眺めていた裕二は、階下に降りる階段へと向かうタクミの背中を追いかける。
　小さく仕切られた薄暗い部屋をいくつか通り抜ける。敷かれたマットには、タクミ同様に腕にロッカーの鍵を通した男たちが、手を出してくれる男が現れるのを待ち、薄目を開けて寝たふりをしている。
　タクミが横たわる男を踏まないように、暗い中をゆっくりと慎重に歩いていく。裕二は先導してくれているようなタクミの背中を見てついていく。

「便所がッ！」横たわる男の一人がタクミを目敏く捉え小さく言葉を吐き捨てる。裕二はドキっとするが、前を歩くタクミの背中には些かの動揺もみられない。それでも裕二の胸にはちくりと、小さくはない痛みが走った。

「身体、流してくるんだろ？」
　階段を降りるタクミの背中に裕二が問う。
「ああ」
　タクミは振り返ることもなく短く答える。
「一階で待ってるよ。ビールでも驕らせてくれ」
「うん」
　同じように短く答えたタクミが不意に立ち止まる。
「風呂……、一緒にどうだ？」
　振り向いたタクミが、二段上に立つ裕二を見上げる。
「ーーん？」
「ーー嫌？」
「いやーー、そんなことはない」
　裕二の答えに頷き、タクミは再び階段を降りはじめる。
「一緒の方がうるさくなくていいんだ」
　前を見たままのタクミが言い訳のように付け加える。
「なんだ、蚊取り線香代わりかょ……」
　声のトーンは変えなかったが表情には不満が走った。自分のその表情の変化に気付いた裕二は小さく苦笑する。或いはその苦笑は、タクミが振り向いて不満な顔を見てくれなかった事への、自分自身の青臭く淡い期待みたいなものへだったのかも知れない。
「背中流し合ったり、洗いっこしたりってのを期待した？」
　期待したよーーそう応えられれば楽なのにな……。裕二の心がざらつく。
　期待したよーーそう応えられればタクミをも楽にしてやれるかも知れないのにな……。裕二の心の中に小さな後悔と小さな希望が見え隠れする。
「蹴り落とすよ？」
　結局そんな言葉を咄嗟に口にしてみる。
「できもしないくせに……」
　裕二は大袈裟に溜息をひとつ吐いてみる。
「さっきの爺さんにみたいに、優しくしてもらいたいものだ」

　その溜息に乗せて裕二は愚痴ってみる。
「精いっぱいの優しさなんだけどなぁ」
「えーー？」
　タクミの言葉に裕二は問い返すが、タクミはそのまま階段を降りていく。問い返した裕二に、声が届いていなかった訳ではない。ただ、その呟きの真意が呑み込めなかっただけだ。「精いっぱいの優しさ……、かーー？」足の止まっていた裕二は、タクミの言葉を口に中で繰り返してみて、一階へ降りきりロッカールームに向かうタクミを大股で追いかけた。

　風呂の準備を整えた二人がロッカールームを出ようとすると、地階にある風呂場からの階段を駆け昇ってきた若い男がぶつかりそうになった。
「あ……」
　若いだけに機敏で、まるでサッカー選手のフェイントのように二人を避けた若者が、タクミを認め声を上げる。
「ーーおぅ」
　タクミも短く応える。
　小柄で線の細い、若い男というよりもまだ少年が、俯いた顔を火照らせている。
「さっきはありがとうな。凄く感じたよ」
　タクミが少年の耳に口を寄せて囁く。囁いたにしては大きな声は裕二の耳にも届く。少年は更に深く火照らせた顔を上げることができない。しかし巻かれたタオルの中は臆することなく反応を示し、薄いタオルを突き上げている。
「若いなぁ……」
　視線の隅で突き上げるタオルを捉えた裕二がボソっと呟く。
「入る時に高校生かと疑われて、年齢確認に免許見られたってさ」
　裕二の呟いた意味を取り違えたタクミが言う。
「ーーだろうな」
　裕二はタクミに合わせ、答えておく。
「あの……」
　意を決したように少年が顔を上げてタクミを見詰める。
「うん？　どした？」
「もう今日は帰られるんですか？」
「いや……、このおじさんがビール呑ませてくれるっていうから、ちょっと休憩かなーー」

　タクミは顔を裕二に傾けながら言う。
「おじさんかぁ……」
「十八歳の子から見れば、俺らは立派なおじさんだよ」
　諭すようなタクミの言いように、裕二も思わず笑いながら頷く。
「おじさんじゃないですッ！　お二人とも……」
　少年が力強く否定する。
「そか。ありがとうな、俺までついでに……」
　風呂上がりの湿り気を残しながらもサラサラとした少年の髪に、裕二は手を置いてみる。柔らかい髪を指に絡め頭を撫でる。少年のはにかむ笑顔に、裕二は不意に小さな痛みを感じる。
「ビール呑んだら……、もう一度いいですか？」
「ーーん」
「駄目ですか？　やっぱりぼくみたいなガキじゃ……」
「そんなことはないよ」
「さっきは初めてだったんで直ぐ終わっちゃってーー」
「それでも、ホントに良かったよ」
　タクミはウインクしてみせる。
「ーーでも、他のおじさんたちみたいに、もっとお兄さんを感じさせてみたいなって……」
「ははは、随分と頼もしいことを……」
　タクミは少年の真摯な思いに戸惑い、照れた笑いに紛らしてみる。
「君、初めてだったんだ……」
　タクミの戸惑いを感じた裕二が口を挟む。
「はい」
「そか、初体験か……」
「えぇ」
「初体験の相手は忘れられなくなるからなぁ……」
「……」
　独り言のように呟く裕二が、何を言おうとしているのか分からない少年に不安気な表情が戻る。
「ウケの人はたくさんいるからーー」
　裕二は上を指差して続ける。
「気になった人に声をかけて、違う人と何人かやっておいでよ」

「え？」
　少年の瞳に怒りが宿るのは裕二にも分かった。短い一言だが、少年の背中に立つタクミにもそれは感じられた。
　そんな少年を宥めるように、裕二はもう一度頭に手を乗せてみる。同時に、動きかけたタクミを目で制す。
「そうすればいつかは曖昧になるからさ……。　初体験の相手の顔なんて思い出せない方が良かったりするんだよ」
「そんなことーー」
　少年は挑むように裕二を見詰める。
「そんなことないッ！　ぼくは……、ぼくは、ちゃんとこのお兄さんとーー」
　激した少年は言葉が続かない。薄っすらと涙を溜めて見詰める少年の頭に乗せたままの裕二の手がうなじに落ちる。裕二はゆっくりと自分の肩に引き寄せてやる。
「男になった日に泣いたりするな」
　少年は裕二の肩に顔を押し付けたまま頷く。
「落ち着いたら上に行って物色しておいで。君が誘えば、みぃ～んな喜んで股開くから」
　わざとらしいほどに冗談めかした口調で裕二が言う。
「ちゃんとゴムだけは使えよぉ～」
　タクミも裕二の口調を真似て言ってみる。
　裕二の胸の中で少年がまた頷いた。

　「蚊取り線香は必要なかったな」
　八人に抱かれたタクミよりも時間をかけて全身を洗い流した裕二が、広い浴槽の中に一人浸かるタクミの脇に腰を落とす。
　脱衣所にも洗い場にも人影はない。ドライとスチーム、二つあるサウナ室の扉の向うは分からないが、どちらにしろ人避けが必要なほどはいなそうだ。
　「そんなことないよ」
　広げた足を投げ出し両手を尻の脇についたタクミは、顎を上げて天井を仰ぎ見るような体勢で目を閉じている。
　「あの子のことだけでも助かったよ」
　「ほぉー、そうですか。せっかく十代の子の硬いおちんちんで突いてもらえるところをって、怒ってるかと思いましたよ」
　意地悪く言う裕二の言葉をタクミは受け流す。

「それでも多分、あの子は上でタクミを待ってるよ」
「うん……、そうだろね」
他人事のようにタクミも肯く。
「俺も若くて可愛い子に、あんな風に一途に思われてみたいものだよ……」
「へぇ〜、年下でもイケるんだ？」
「あぁ、全然平気」
「でも、あの子タチだよ？」
「あぁ、全然平気」
「へ！？」
「ーーん？」
「祐ちゃん、ケツ……イケるんだ？」
「あぁ、嫌いじゃないよ」
「ふぅ〜ん」
「え？　ダメ？」
「いや、全然ダメじゃないよ。安心した」
「安心……？」
「ぅーー、うん。なんて言うか……、ほら……。まぁ安心したーー」
タクミは慌てたように言葉を濁すと、深呼吸してまた目を瞑った。
そんなタクミの知性を感じさせる少し広めの額に、汗が水銀のように玉になっている。その玉が滲む汗に体積を増し、張力の許容を超えて頬を鼻筋を流れ落ちる。
裕二はその端整な横顔に見惚れる。鮮やかに赤く薄い唇に欲情する。もう一筋、額の上の汗が流れたら唇を合わせてみよう。そう考えながらも勇気を出せずに、汗の流れを見送っている。
「ガタン」と必要以上に大きな音をたててドライサウナの扉が開き、四十代ぐらいの小柄な男が出てきた。男は水風呂に浸かるでもなく、シャワーを浴びるでもなく、何かに追われるように脱衣所に出て行った。
タクミは何も聞こえなかったかのように目を閉じたままでいる。裕二は立ち上がってみる。湯から出たペニスも勃ち上がっていたりする。見下ろすタクミは目を閉じたまま微動もしない。裕二は自分の膝に手をついて腰を折り、唇を合わせてみる。閉じている二人の唇が斜に重なったまま十数秒の短い時が流れる。
「ふん……」二人の唇が離れると、タクミが鼻で小さく笑う。その小さな笑いに、自嘲と淋しさが含まれているのをタクミ自身が知っていることを、裕二もまた知っている。だから裕二にはその小さな笑い顔が、小さな泣き顔に見えてしまったりする。

「バカ」
　お湯を掬って顔をごしごしと擦るタクミが篭った声で言う。
「ビール呑む前に喉を乾かそうぜ」
　タクミの一言は大事に胸にしまって、裕二はことさら陽気に声をかけ、ドライサウナの方に顎をしゃくる。
「俺はもう充分に乾いてるよ」
「いいから、もう少し」
「上で充分に汗かいて、声あげてきたから、もうカラカラだよ」
　重ねられた誘いに、投げ遣りな調子でタクミは答える。
　裕二は湯の表面を思い切り蹴り上げる。
「バカ」
　湯をまともに正面から浴び溺れたふりでおどけるタクミに、裕二は胸にしまった筈の大事な言葉を返してしまっていた。
「バカ……」

　一階のロッカールームの裏にあるテレビの置かれた休憩室にも、テーブルに上体を突っ伏して寝ている中年の男が一人いるだけだった。
　裕二が自販機でビールを買っている間に、タクミは置き捨てられたバスタオルを何枚か拾い、乾いているものを寝ている男の肩に掛けてやっている。
「いや、知らない人。――多分、やったこともないよ」
　目顔で問う裕二にタクミは答える。
　自販機から落ちたビール二本をタクミに渡し、更に二本分のコインを裕二は投入する。
「人、少ないねぇ、今日は……」
　二人だけの休憩室でビールを開ける。
「こんなにいないとは思わなかった」
　タクミはリモコンでテレビを消しながら答える。
　裕二はパッケージから煙草を振り出して咥え、灰皿に置いてあるマッチを擦る。
「これだけ人が少ないからかな……」
　ぼんやりと裕二の口元の赤い先端を見詰めるタクミが呟く。
「ん？」
「いや……、風当たりが一段と強かったから」
「風当たり？」
「うん。ほら他のウケの方々からの――」

ヤケクソのように笑って言うタクミに、裕二はこの話を続けまいと返事をせずに曖昧に頷く。
「絶対数の少ないタチを俺が独占しているって……」
裕二の気持ちとは裏腹にタクミの弱気な声が続く。
「気にすんなよ」
裕二は仕方なく声をかける。
「気になんかはしてないけどね……。便所って笑われているのも知ってるし、実際、手を出してくる人は断らずに掘ってもらってるしね」
「――」
返す言葉もなく、裕二は煙を吐き出し、二本目のビールを開ける。
「そんな辛そうな顔をすんなよ。言われてるのは裕ちゃんじゃなくて俺なんだから――。それに、言われてる俺が便所だと自分自身思ってるんだから」
「そういう言い方は――」
堪らずに荒げた声で言いかける裕二の言葉をタクミは遮る。
「でもね多かれ少なかれ、ウケは便所になりたいって思ってくるんじゃないのかなぁ……、受け入れる数に個人差はあるだろうけどね。昔の事は知らないけどさ、ネットも携帯も呑み屋さんもクラブのイベントも――、これだけ出逢う機会や場所がある今の時代、ただセックスをしたいからサウナに来るなんてのはナンセンスだよね。一対一のセックスなら他でもっと手軽に、入場料もかからずに見つけられるしさ。気持ち良いセックスをしてくれる唯一人の人を探しに来るにしたって、ある程度便所みたいになって多くの人とやってみないと判らないしね。――見た目でどんなセックスしてくれるかなんて判断できないんだから」
「タクミはセックスの合う唯一人の人を求めて便所やってるのか？」
裕二は刺々しくならないように慎重に語調を整えて訊いてみる。
タクミはこの日初めて、裕二の瞳をきちんとまともに見詰める。とても穏やかで慰めさえをも持っていそうな視線に、見詰められた裕二の方がたじろいでしまう。
「もう唯一人の人は見付かってるんだ。セックスだけじゃない……、うぅん、セックスも含めた唯一人の人がね――」
「そか……」
裕二は慌てたように新しい煙草を咥えマッチを擦る。忙しく煙を吐き出しながら缶を手に取るが、呑み干していることに気付き握り潰す。
そんな裕二をタクミは、変わらぬ温かい気持ちで見詰め続けている。――心の中で手を合わせながら……。

「ご馳走さま」
　タクミは呑まなかった一本を裕二の前に置いて椅子を立ち、呑み干した一本の空き缶と握り潰された二本の缶をゴミ箱に捨てる。
「タクミ……」
　そのまま休憩室を出ようとするタクミを裕二は呼び止めるが、かけようとする言葉が探しきれない。
「祐ちゃん――」
　立ち止まって振り返ったタクミは、何かを思い切るように言葉を続ける。
「九枚目のコンドームをしてもらいたくない人っているんだよ」
　裕二は返す言葉も探しきれない。いや、探すことすらできない。
　それでも頷いている裕二に、タクミもまた小さく頷いてみる。
「祐ちゃんにもらった電話番号――、あれ大事に、大事に取ってあるから。必ず……、ぅん、必ずその内に連絡させてもらうから――」
　精いっぱいの勇気に胸いっぱいの『ごめんなさい』を乗せて、タクミはそれだけ言うと室を出る。――が、ふと何かを思いつたように顔だけをもう一度のぞかせる。
「祐ちゃん――」
　呼びかけられた裕二の首が、聞こえたことを示すかのように少しだけ動く。
「俺も……、タチるの――、嫌いじゃないよ」

　微かに聞こえる出て行くタクミの足音を聞きながら、裕二は三本目のビールを開けてみる。何本目かの煙草をパッケージから振り出し咥えてみる。
　半年ぐらい前に初めて抱いたタクミの過去に、何があったのか裕二は知らない。何かがあったかどうかも分からない。
　この半年間、見る度に多くの男たちに犯り捨てられているタクミを、何がそこまで追い詰めているのかも裕二は知らない。何かに追い詰められているのかどうかも分からない。
　タクミの過去に何か途轍もなく辛い事なり時なりがあって、追い詰められたぎりぎりの所で今それと対峙しているのではないか。確りとした根拠がある訳では、――勿論ない。生温かくなったビールを喉に流し込みながら、裕二は、ただそんな風なことをまた考えている。
　タクミが、その何かに自分なりのケリをつけられた時には、或いはその何かに対する答えを見つけられた時には、俺の元に来る筈だと、信じられる気がする――と裕二は強く

思う。
　もし仮に、今のタクミはただ単に発情期に在るだけで、月に幾度か大勢の男たちに輪姦されなけば収まりがつかないだけなのだとしても――。それでも充分に気が済んだ時には、俺の元に来る筈だと、これもまた信じられる気がすると――裕二は強く思う。
　それまでは裕二にとっても、辛い時間が流れるだろうと思う。しかし、辛いことに目を瞑ることが必要なときもあると裕二は考える。それは決して、逃げる訳でも卑怯な訳でもない筈だと考える。
　裕二は三本目の生温いビールを呑み干し、勢いよく缶を握り潰してみる。潰れた缶が手に残る。
「俺は潰されないよ……、タクミ。待ってるからな。潰されずに、ちゃんと待ってるから」
　そんなことを、独り、言ってみる。

　駅に向かう歩道橋――。首都高速の向う側、挟まれたビルの間に僅かに見える看板に、裕二はそっと口の中で呟く。
「負けるなよ……　負けないよ……」

THANK　YOU　！

お読みいただき、真にありがとうございます。

無駄な時間と電気代を使わせてしまい、申し訳ありませんでした。

個人的には、記念すべき 「老川柔」 名義、第一作になります。

反響？　反応？　そんなものがありましたら、書く意欲につながります。

　　厳しい御意見、大歓迎でございますです！

九枚目のコンドームを 三本目の缶ビールに

http://p.booklog.jp/book/75338

著者：老川　柔
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/newoikawa/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/75338

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/75338

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ